

氏 名 新海 拓郎

学位(専攻分野) 博士(文学)

学位記番号 総研大甲第 2438 号

学位授与の日付 2023 年 9 月 28 日

学位授与の要件 文化科学研究科 地域文化学専攻
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 奈良県大和郡山の金魚養殖をめぐる民俗誌—養殖池・生産
技術・販売と流通—

論文審査委員 主 査 卯田 宗平
人類文化研究コース 教授
池谷 和信
人類文化研究コース 教授
齋藤 玲子
人類文化研究コース 准教授
岡本 信明
横浜美術大学 学長
武藤 康弘
奈良女子大学 人文社会学科 教授

博士論文の要旨

氏 名： 新海 拓郎

論文題目：奈良県大和郡山の金魚養殖をめぐる民俗誌—養殖池・生産技術・販売と流通—

養殖業は第二次世界大戦後に飛躍的な発展を遂げ、近年では水産物の安定供給や資源保護の観点から、水産業の中で養殖業の重要性が増大してきている。養殖の対象は食用としてはブリ、タイ、コンブ、カキ、黒鯉、アユ、サケ・マス類、ウナギ、観賞用としては錦鯉、メダカ、そして金魚などが挙げられる。なかでも金魚の養殖は江戸時代に武士が副業で行って以来、現在まで続く伝統的な生業であり、先に挙げた魚種の中でも歴史が古いものである。金魚とは野生のフナを起源として観賞用に品種改良が行われてきた魚である。現在は一般家庭で広く愛玩されている。また、愛好家と呼ばれる人々は品評会に入賞する1匹の魚を育てあげていく。民俗学の分野では愛好家の金魚飼育に注目した飼育技術について、地理学では養殖産地の形成過程が主に論じられてきた。生業研究の中では獲る漁業が注目されがちであり、それに対して養殖業、とりわけ観賞魚の生産については等閑視されてきた背景がある。そこで、本研究では愛好家や一般家庭での飼育ではなく、養殖業者による商業的な金魚の生産活動に着目し、①生産の場としての池、②養殖業者の民俗技術、③金魚の販売・流通という3点から金魚と人との多様な関わり方を把握することを目的とする。

調査地は奈良県大和郡山市である。全国の金魚の産地の中でも歴史が古く、和金という原種に近い廉価な品種の大量生産が当該地の特色となっている。和金以外の中・高級品種も生産されているが、本研究では和金の大量生産に焦点を当てる。筆者は2018年1月から2019年10月まで調査地に住み込み、主に3軒の養殖業者への参与観察、古老4名からの聞き取り調査、金魚が売買されるセリの見学をメインに行ってきた。

その結果は以下の通りにまとめられる。生産活動の場としての池、金魚生産の技術と民俗知、金魚販売の技術と流通である。本論文は序章、第一章から第七章、終章の計9つの章で構成される。

生産活動の場としての池は第I部にあたる。現在の池の利用方法と養殖施設の歴史的変遷を議論した。第一章では生産活動の基本を提示した上で、4軒の養殖業者の池の使い方を明らかにした。そして、金魚池のみを利用する例と金魚池とため池の両方を利用する例に分かれ、それぞれ池の利用の仕方が異なっていた。とりわけ、和金類の生産の場合には、早く成長させることよりも通年出荷できるようにコアカ（小さいサイズの和金類）の大きさを維持することに重点が置かれ、各自が独自の方法を用いて密度管理していた。大和郡山ではかつては水田、金魚池、ため池という多様な池が養殖に使われてきたが、現在は金魚池とため池が使われる。水田養魚の復元と衰退の理由、金魚池の類型化、ため池養殖の盛衰を明らかにした。一番大きな変化をもたらしたのは高度な技術が求められるため池養殖であった。また、池を借用して行われるため池養殖では適地の選択と情報の秘匿という現象が確認された。平野内にあるため池を金魚の養殖池として利用することで、無選別で

大量に生産できる和金の生産へとシフトしていったことが明らかになった。

金魚生産の技術と民俗知は第Ⅱ部にあたる。産卵（第三章）、孵化（第四章）、水づくり（第五章）に焦点を当て、金魚池とため池での技術を比較した。まず、金魚池とため池の共通点は成長の管理のために卵や仔稚魚の放流数を調整することである。また、各氏は環境に応じて産卵や孵化の方法を柔軟に変化させていた。高密度飼養のために「青水」と呼ばれる植物プランクトンを増殖させた水が欠かせない。この青水の作り方（水づくり）の技術に金魚池とため池では違いが見られた。金魚池では有機肥料を投入するタイミング、ため池では有機肥料および無機窒素肥料の投入量の調整が重要であった。

金魚の販売と流通は第Ⅲ部にあたる。第六章では民俗分類について、第七章では出荷と販売について取り上げる。和金類は大きさで用途が異なる為に大きさによって分類されてそれぞれに市場名が付けられている。流通する際には、大きさによる分類と年齢による基準と2つの基準が交差することを明らかにした。セリでは和金類の取り扱いが全体の56%を占める。さらに、セリで扱われる魚の品流れを分析した結果、和金類の69%が産地内で流通していることが明らかになった。つまり、生産調整の場としてセリが機能していることが確認された。また、セリが重要な情報交換の場として機能していることも示された。

終章では、第Ⅰ部から第Ⅲ部までを総括して考察を行った。具体的には、ため池養殖を可能にした技術的側面を明らかにした。次に、品種、セリ、民俗技術の3点を他産地と比較し、大和郡山の金魚養殖の特徴を明確化した。そして、大和郡山の金魚養殖業における人間と魚、人間と環境の関わりについての検討を行った。さらに、金魚養殖を事例として魚類の養殖とドメスティケーションの関連性についても議論を行った。

本論文の冒頭で言及した先行研究とは異なり、現代の金魚養殖について民俗学・地理学の側面から池・民俗技術・流通についての議論を行ってきた。養殖業者は一朝一夕に変化する環境の変化を観察しながら、池の特質を鑑みて、給餌や施肥を行うのである。つまり、金魚養殖業では魚と人間との間に環境というファクターが介在しているといえる。これまで民俗学では取り上げられてこなかった水産養殖業について金魚養殖を事例として新たな知見を加えることができた。

博士論文審査結果

Name in Full
氏名 新海拓郎

Title
論文題目 奈良県大和郡山の金魚養殖をめぐる民俗誌—養殖池・生産技術・販売と流通—

本論文は、奈良県大和郡山市における商業的な金魚養殖を対象とし、生業としての金魚生産を「生産環境としての池」「産卵と孵化の技術」「販売と流通」という3つの側面から明らかにしたものである。

金魚とは中国南部に生息する野生のフナ (*Carassius auratus auratus*) をもとに改良が重ねられた観賞魚である。これまで、金魚に関しては琉金や出目金、ランチュウといった高級品種を取りあげ、愛好家による品種改良や飼育、産地形成に関わる民俗学・地理学的研究が少ないながら蓄積されてきた。一方、本論文が注目する和金は原種に近く、金魚すくい用として特定の産地で商業的に大量生産が続けられている品種である。この品種に関しては、養殖の歴史が長いにもかかわらず養殖技術の詳細を分析した研究がなかった。申請者である新海は、金魚生産の歴史が古く、いまでも和金の大量生産を続ける大和郡山市を対象に、現地に1年9カ月間住み込みながら調査をおこない、和金の生産環境から生業技術、流通構造などを明らかにした。

本論文は序章と終章を含めた全9章で構成される。序章では先行の研究を通して人文科学分野における養殖研究の少なさと生業としての金魚養殖を取りあげる重要性が学史を踏まえながら説かれる。第1章では4軒の養殖業者による金魚池とため池の利用実態を調査し、和金を早く成長させず、通年出荷できるよう体長を維持する密度管理という生業技術の詳細が明らかになる。第2章では平野の池で金魚養殖をおこなうことが多い大和郡山において、成長途中に選別が不要な和金が積極的に選ばれてきた事実を歴史資料にもとづきながら明らかにした。第3章では産卵前の準備から採卵にいたる技術を記述し、いずれの生産環境でも高密度飼育のための放流匹数の調整が重要であることが示された。第4章ではコンクリート製の孵化槽や直漬け(池に卵を直接入れる方法)など3つの孵化技術を記述し、生産のみか生産兼卸売かという商業形態の違いに応じて選択される孵化技術が異なることを明らかにした。第5章では、稚魚の成長プロセスに応じて口径にあうサイズの餌ミジンコを発生させる技術の詳細とその重要性が明らかになる。第6章では市場の需要に応じた和金の民俗分類が示され、第7章では和金の流通経路と出荷量の季節性に関わる調査からセリが和金の生産調整の場として機能していると指摘した。終章では、各章の成果を踏まえ、他地域や他品種との比較から水産試験場をもたない大和郡山市における養殖技術の向上を協同組合の自助的な活動から考察するとともに、原種に近い特徴を留めおく点に和金生産の特徴があると結論づけた。

このような本論文には以下のように優れた点を大きく4つ挙げられる。

これまで民俗学や生態人類学では生業としての漁獲漁業に関わる研究が多く、生き物文化誌学では愛好家による金魚の育種や品種改良に関わる研究に蓄積がみられる。一方、本

論文ではこれまで民俗誌として描かれることがなかった生業としての金魚養殖に着目し、大量生産の技術を「生産環境」「生業技術」「出荷と流通」という三つの側面から広く捉えた点に新規性がある。

また、本論文は生産者への丹念な聞き取りと参与観察を通して、金魚の初期餌料であるミジンコを確保するためにおこなわれる鶏糞投入のタイミングを金魚池やため池ごとで把握し、生産者の限られた努力量で目的の生産量をあげるという粗放的な金魚生産技術の実態を初めて明らかにした点も高く評価できる。

さらに、本論文は生産技術の描写だけでなく、大和郡山における金魚養殖の発展要因をため池での黒鯉養殖の衰退など戦後日本における食生活の変遷と関連付けて分析した点が特筆される。くわえて、養殖用ため池が奈良盆地全体に広がっていたことを分布地図の作成から明示し、奈良の地域研究に貴重な一次資料をもたらした点も評価できる。

一方、本論文には課題もある。第一にかつて水資源が乏しかった奈良盆地で大量の水を必要とする金魚養殖が開始された歴史的展開に関わる論述が不足していること、第二に出荷した商品がどのように消費され、消費者のニーズが生産にいかに関与するのかという生産と消費の相互作用をさらに解明する必要があることである。

とはいえ、申請者は公開発表会において上に挙げた課題についての的確に回答しており、今後研究をさらに掘り下げていくための基盤は築かれたと判断できる。以上、本論文はこれまで詳細な調査がなかった商業的な金魚養殖の技術に着目し、その特徴を他地域や他品種との対比から明らかにしたものであり、将来的に中国や東南アジアでの金魚飼育、ひいては錦鯉やほかの養殖魚との種間・品種間比較研究を進める礎となる成果として、博士の学位を授与するに値すると審査委員全員一致で判断した。